今昔の中学生のバウムテスト表現の検討
― 1960年代と2010年代との発達指標を通して ―

佐渡忠洋[1, 2]・岸本寛史[3]・山中康裕[4, 5]
1）常葉大学健康プロデュース学部，2）名古屋大学大学院教育発達科学研究科
3）高槻赤十字病院緩和ケア診療科，4）京都ヘルメス研究所，5）京都大学名誉教授

<要　旨>

背景：心理アセスメント技法の中で最も活用頻度の高いバウムテストは、発達に関する古い知見が今でも使われている。そこで本研究は、中学生のバウム表現を今昔で比較することで、発達知見を一部更新するために行われた。方法：本研究グループが有する、1967年（昔）の中学生1,087名のバウムと、2011～13年（今）の中学生94名および347名のバウムを、Kochの58指標ならびに幹先端処理の類型法を用いて比較した。結果：1) Kochの58指標の内、早期型は今昔でほとんど差が無く、2) 昔よりも今で枝が描かれなくなっていた。また、3) 幹先端処理では昔よりも今で「冠型」が増え、「放散型」と「基本型」が減り、4)「上縁はみ出し」は昔よりも今で減り、特に今の中学生は用紙上縁から幹と枝をほとんどはみ出さなくなっていた。結論：本研究のみで明確な結論は出せないものの、私らしさを表現する態度・在り様が、昔に比して今の中学生では稀薄であるとの仮説が導き出された。なお、知見をできるだけ共有するために、検討したすべての数量的結果は本稿に記した。

<キーワード>

表現（expression）、幹先端処理（apical termination）、包冠線（tree-crown-outline）

【問題と目的】

バウムテストとは、「実のなる木」を描くよう求める簡便な心理アセスメント技法であり、臨床場面では頻繁に活用されている（小川，2011）。しかし、発達領域に関する知見は、今日でも1960～70年代のものに頼っているとの問題がある。すなわち、バウム（描かれた木）理解において発達データは重要な拠り所であるにも関わらず、臨床家・研究者は古い参照枠を用いざるをえない現状にある。こうした問題から、本研究グループの岸本寛史は、現代の発達研究に関するパイロットスタディを行い、小学1年～高校3年までのデータを分析して幾つかの仮説を導き出した（岸本・岸本，2012）。現在、われわれの手許にはこれら以外にも、山中康裕が1967年に収集した中学生のバウム、佐渡忠洋が2011-13年に収集した中学生のバウムがある。

そこで、本研究においてわれわれは、上述のデータを用いて、1960年代と2010年代とのバウムを比較し、時代によって表現がどのように変化したかの検討することで、発達研究の知見の一部を更新する。中学生という限られた年齢幅だけではあるが、この研究結果は、古い基準を修正しつつ用いている多くの臨床家・研究者に、有意義な示唆を提供できるであろう。

【方法】

1）対象と手続き

対象はすべて中学生である。データの内訳は、

山中が 1967 年に収集した 1,087 名、岸本らが 2011 年に収集した 94 名、佐渡が 2011-13 年に収集した 347 名（2011 年に中学 1～3 年を調査し、2012～13 年は中学 1 年のみを調査した）、である。本データの特徴は表 1 に整理した。

評定の均一性を確保するため、二本以上のバウムを描いたか、文字のみを描いたデータは除外した。その結果、検討の対象となった人数（男/女）は、表 2 に示した。

2）評定

データの分析に際して、Koch（1957/2010）が発達研究において活用した 58 指標、および藤岡・吉川（1971）が提唱し、バウム理解において有意義とされる幹先端処理から検討を行うこととした。

Koch の 58 指標の評定基準は中島（2008）に従った。また、一谷・林・津田（1968）と岸本ら（2012）で採用された 5 つの指標も用いた（後述する表 2 では①～⑤の番号で示した）。バウムの評価は臨床心理士 3 名が個別に行い、3 名の評価結果を照らし合わせた後、2 名以上の評価が一致したものを最終評価とした。

表 1　本研究データの特徴

データ名	山中	岸本ら	佐渡
調査年	1967 年	2011 年	2011-13 年
地域	愛知	京都	岐阜
対象	学校全生徒	各学年の 1 クラス	学年全生徒
Tester	山中	岸本幹史	佐渡
用紙	A4	A4	A4 縦長
鉛筆	B2-B6	B4	B4
教示	実のなる木を一本描いてください	実のなる木を一本描いてください	実のなる木を描いてください

幹先端処理は、幹の内空間をどのように処理したかに着目する岸本（2002）の基準に従った。臨床心理士 2 名が一枚一枚議論して分類した。ただし、バウムが用紙からはみ出しているために、幹の内空間の処理様式が判断できないものは「その他」とした。なお、山中データには「上縁はみ出し」が多いとの印象を持っていたため、「用紙の上縁からバウム形態部のどこがはみ出しているか」を理解するために、下位項目として「幹はみ出し」「枝はみ出し」「樹冠はみ出し」の指標も設け、分類を行った（下位項目の分類は重複可）。

3）分析方法と比較対象の拡張

分析は記述統計で行う。すべての指標に有意差検定をかけなかった理由は、坂本ら（2012）において既に論じてある。

その際、Koch（1957/2010, p.330-331）のデータ、および一谷ら（1968）のデータとも比較する（以下、データ名は Koch と一谷らと呼ぶ）。

Koch データは、彼のテクストと中島（2010）による解題によれば、1953 年にスイスで集団法によって調査されたものであり、A4 の用紙を使い、教示は「果物の木を 1 本、できるだけ上手に描いてください」（独語）である。わが国の中学生に相当する学年は、該当頁の表内の初等学校 6～8 年である。一谷らデータは、1966 年に大阪市で集団法によって調査されたものであり、A4 の用紙を使い、教示は「実のなる木を描いて下さい」である。

Koch・一谷らの両データには、二本以上のバウムを描いたデータも含まれている点を留意されたい。なお、それらの原データはわれわれの手許には無いため、本研究で用いる全指標で評定作業を再度行うことはできなかった。両デ

ータの人数(男子/女子)は表2に示してある。

以下、Koch・山中・一谷らデータを「昔」、岸本ら・佐渡データを「今」として表わす。

【結果】

1）Kochの58指標

表2に、Kochの58指標＋5指標の結果を示した。表の左端に、Kochが早期型（発達に伴い出現頻度が低下する指標）に■でチェックした（早期型と一括りで言っても、その内実は個々の指標で違いがあり、「早期型が多い＝発達の遅れ」と単純化して理解すべきではない）。彼は明確に早期型を定めていないため、筆者らがテクストを読んでここに抽出した。表の右端には、特徴的な結果が認められたものにチェックした。「時代的影響」とは今昔比較より出現頻度に差が出ている指標で、影響が大きいものに●を、影響が小さいものに○を入れた。「昔よりも今で」には、1960年代と見比べた2010年代の出現頻度の増減を矢印で示した。「文化的影響」はKochデータとわが国の4つのデータとを見比べ、文化差（スイスvs.日本）で差が生じている可能性がある指標に✔を入れた。

早期型を取り上げると、「No.17：暗く塗られた幹」「No.18：暗く塗られた枝」だけに今昔で差が認められ、両指標とも、昔よりも今で出現頻度が下がっていた。しかし、他の23個の早期型には差が無いようだった。

早期型以外の指標に関しては、それら一つ一つを取り上げるよりも、バウム形態部ごとに結果を整理する方が有意義であると思われた。そこで、「幹」「枝」「樹冠」「実」の形態部ごとに今昔で比較し、まとめたものを表3に示す。

2）幹先端処理とはみ出し

表4に、幹先端処理とはみ出しの結果を示した。右端の「時代的影響」「昔よりも今で」が意味するところは、表2と同じである。

幹先端処理で目を惹く結果は、昔よりも今で「冠型」が増え、「放散型」「基本型」が減った点である。そこで、山中と佐渡データ間で、フィッシャーの直接確率計算法を用いて比較したところ(岸本らデータは対象者数が少なかったため、統計学的分析の対象にはしなかった)、「冠型」が中1で$p<.001$、中2で$p<.001$、中3で$p<.001$、「放散型」が中1で$p=.002$、中2で$n.s.$、中3で$p=.022$、「基本型」が中1で$p<.001$、中2で$p=.040$、中3で$p<.001$と、ほぼすべての学年で有意差が認められた。この差異は、昔のバウムは枝と葉でもって幹上部のエリアを構成する傾向がある一方で、今のバウムは、山中(2003)の言う包冠線(樹冠を包む線、樹冠の外輪郭を示す描線)でもって幹上部のエリアを確保しやすいことを示している。「その他」が昔よりも今で減っていることは、「上縁はみ出し」が減ったためである（統計結果は中1で$p<.001$、中2で$p<.001$、中3で$p=.002$）。

本研究で定めた「上縁はみ出し」の下位項目に関しては、昔は幹と枝が用紙上縁よりはみ出す者が多かったが、今はそうした表現はほとんど認められず、上方へとはみ出すのは樹冠のみである、となろう。ここでも山中と佐渡データ間で、フィッシャーの直接確率計算法による比較を行ったところ、「上縁はみ出し」が中1で$p<.001$、中2で$p<.001$、中3で$p=.003$、「幹はみ出し」が中1で$p<.001$、中2で$p<.001$、中3で$p<.001$、「枝はみだし」が中1で$p<.001$、中2で$p<.001$、中3で$p<.001$、「樹冠はみ出し」が中1で$p=.001$、中2で$p=.028$、中3で$p<.001$と、すべての学年で有意差があった。

表 2　Koch の 58 指標による今昔比較

早期型	No	指標名	中1 Koch スイス 1953年 243 (127/116) 人数 (%)	中1 一谷ら 大阪 1966年 71 (32/39) 人数 (%)	中1 山中 愛知 1967年 345 (148/197) 人数 (%)	中1 岸本ら 京都 2010年 32 (16/16) 人数 (%)	中1 佐渡 岐阜 2011-13年 188 (99/89) 人数 (%)	中2 Koch スイス 1953年 204 (91/113) 人数 (%)	中2 一谷ら 大阪 1966年 73 (39/34) 人数 (%)
■	1	全水平枝	1 (0)	—	2 (1)	1 (3)	0 (0)	1 (0)	—
■	2	一部水平枝	17 (7)	—	12 (3)	1 (3)	2 (1)	9 (4)	—
■	3	直線枝	2 (1)	—	4 (1)	0 (0)	1 (1)	5 (2)	—
■	4	十字型	23 (9)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (3)	—
■	5	一線幹	2 (1)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	6	二線幹	241 (99)	—	335 (97)	31 (97)	188 (100)	204 (100)	—
■	7	一線枝	74 (30)	10 (14)	11 (3)	0 (0)	6 (3)	31 (15)	4 (5)
	8	一部一線枝	11 (5)	10 (14)	90 (26)	4 (13)	5 (3)	8 (4)	11 (15)
	9	二線枝	172 (71)	59 (83)	308 (89)	24 (75)	77 (41)	186 (91)	68 (93)
■	10	全直交分枝	3 (1)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	11	一部直交分枝	67 (28)	—	25 (7)	2 (6)	12 (6)	62 (30)	—
■	12	地面までの枝	2 (1)	0 (0)	5 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	13	一部低在枝	15 (6)	—	19 (6)	1 (3)	18 (10)	12 (6)	—
■	14	幹の中の葉や実	0 (0)	—	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
■	15	樹冠のない幹、付属程度の短い枝のある幹	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
■	16	日輪型や花型	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
■	17	暗く塗られた幹	68 (28)	—	54 (16)	1 (3)	5 (3)	56 (27)	—
■	18	暗く塗られた枝	45 (19)	—	48 (14)	0 (0)	3 (2)	41 (20)	—
	19	陰影手法の樹冠（枝なし）	7 (3)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15 (7)	—
	20	実	34 (14)	57 (80)	253 (73)	28 (88)	157 (84)	22 (11)	54 (74)
	21	葉	100 (41)	55 (78)	277 (80)	5 (16)	31 (16)	70 (34)	63 (86)
	22	花	2 (1)	2 (3)	2 (1)	0 (0)	5 (3)	0 (0)	1 (1)
■	23	大き過ぎる実や葉	12 (5)	—	9 (3)	0 (0)	5 (3)	10 (5)	—
	24	黒塗りの実や葉	15 (6)	—	25 (7)	1 (3)	3 (2)	10 (5)	—
	25	空中の実（球形樹冠）	2 (1)	—	5 (1)	19 (59)	122 (65)	2 (1)	—
	26	落下中の、あるいは落下した実、葉、枝	18 (7)	—	25 (7)	1 (3)	8 (4)	31 (15)	—
■	27	空間倒置	3 (1)	15 (21)	5 (1)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	6 (8)
	28	一線根	14 (6)	—	6 (2)	3 (9)	4 (2)	4 (2)	—
	29	二線根	26 (11)	—	42 (12)	11 (34)	33 (18)	31 (15)	—
	30	モミ型幹	36 (15)	—	130 (38)	3 (9)	2 (1)	18 (9)	—
	31	半モミ型幹	4 (2)	—	45 (13)	1 (3)	3 (2)	9 (4)	—
	32	円錐幹	9 (4)	—	77 (22)	6 (19)	110 (59)	6 (3)	—
■	33	幹下縁立	2 (1)	34 (48)	144 (42)	6 (19)	84 (45)	19 (9)	21 (29)
■	34	まっすぐな根本	10 (4)	—	3 (1)	5 (16)	7 (4)	0 (0)	—
	35	球形樹冠	7 (3)	—	10 (3)	22 (69)	157 (84)	31 (15)	—
	36	カール状樹冠	5 (2)	—	2 (1)	0 (0)	2 (1)	3 (1)	—
	37	もつれた線の樹冠	3 (1)	—	9 (3)	0 (0)	2 (1)	3 (1)	—
	38	管状枝	23 (9)	8 (11)	52 (15)	8 (25)	30 (16)	30 (15)	9 (12)
■	39	さまよった長すぎる枝	39 (16)	—	4 (1)	0 (0)	1 (1)	27 (13)	—
■	40	さまよって空間をうめる	1 (0)	—	2 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	—
	41	樹冠における主題の変化	0 (0)	—	3 (1)	2 (6)	9 (5)	0 (0)	—
■	42	幹上直	10 (4)	4 (6)	2 (1)	1 (3)	1 (1)	4 (2)	2 (3)
■	43	枝先直	2 (1)	6 (8)	17 (5)	0 (0)	12 (6)	1 (0)	3 (4)
	44	切断された枝、折れた枝、折れた幹	9 (4)	—	19 (6)	0 (0)	1 (1)	27 (13)	—
	45	幹の瘤や凹み	8 (3)	—	31 (9)	0 (0)	2 (1)	12 (6)	—
■	46	積み重ね型	8 (3)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	11 (5)	—
■	47	ステレオタイプ	9 (4)	—	6 (2)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	—
	48	留め杭や支柱	12 (5)	—	4 (1)	0 (0)	0 (0)	14 (7)	—
■	49	梯子	4 (2)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	—
	50	格子で保護、針金	4 (2)	—	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	51	変質型	3 (1)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (4)	—
	52	三次元（「目」を除く）	19 (8)	31 (44)	83 (24)	0 (0)	4 (2)	9 (4)	36 (49)
	53	逆向きの分枝	9 (4)	—	22 (6)	1 (3)	0 (0)	2 (1)	—
	54	付属品	14 (6)	—	1 (0)	0 (0)	3 (2)	10 (5)	—
■	55	多くの風景	1 (0)	—	3 (1)	1 (3)	9 (5)	7 (3)	—
	56	ほのめかされるだけの風景	148 (61)	—	113 (33)	11 (34)	36 (19)	114 (56)	—
	57	島や丘の形	4 (2)	—	1 (0)	1 (3)	0 (0)	2 (1)	—
	58	上縁はみ出し	10 (4)	—	117 (34)	3 (9)	26 (14)	18 (9)	—
	①	根なし	203 (84)	54 (76)	299 (87)	18 (56)	151 (80)	169 (83)	53 (73)
	②	一線枝全体 [7+8]	158 (65)	20 (28)	101 (29)	4 (13)	11 (6)	39 (19)	15 (21)
	③	枝なし	—	2 (3)	26 (8)	8 (25)	105 (56)	—	1 (1)
	④	水平枝全体 [1+2]	18 (7)	3 (4)	14 (4)	2 (6)	2 (1)	10 (5)	4 (5)
	⑤	直交分枝全体 [10+11]	20 (29)	3 (4)	25 (7)	2 (6)	12 (6)	62 (30)	2 (3)

中2（つづき）			中3								
山中 名古屋 1967年 334 (187/147)	岸本ら 京都 2010年 31 (15/16)	佐渡 岐阜 2011年 72 (32/40)	Koch スイス 1953年 183 (100/83)	一谷ら 大阪 1966年 67 (34/33)	山中 名古屋 1967年 398 (204/194)	岸本ら 京都 2010年 22 (10/12)	佐渡 岐阜 2011年 80 (39/41)		時代的影響	昔より今で	文化的影響
人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	No			
1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1			
10 (3)	1 (3)	0 (0)	15 (8)	—	35 (9)	1 (5)	0 (0)	2			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—	3 (1)	0 (0)	1 (1)	3			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	—	1 (0)	0 (0)	1 (1)	4			✔
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	5			
327 (98)	31 (100)	72 (100)	183 (100)	—	396 (99)	22 (100)	80 (100)	6			
6 (2)	0 (0)	3 (4)	34 (19)	5 (7)	13 (3)	0 (0)	3 (4)	7			✔
87 (26)	0 (0)	2 (3)	15 (8)	2 (3)	149 (37)	0 (0)	1 (1)	8	●	↘	✔
293 (88)	9 (29)	33 (46)	136 (74)	62 (93)	372 (93)	8 (36)	31 (39)	9	●	↘	
0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10			
32 (10)	0 (0)	1 (1)	36 (20)	—	59 (15)	0 (0)	3 (4)	11	○	↘	✔
0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	12			
12 (4)	1 (3)	5 (7)	19 (10)	—	31 (8)	0 (0)	8 (10)	13			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	16			
34 (10)	2 (6)	1 (1)	76 (42)	—	16 (4)	0 (0)	2 (3)	17	○	↘	✔
23 (7)	0 (0)	0 (0)	46 (25)	—	21 (5)	0 (0)	1 (1)	18	○	↘	✔
0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (5)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	19			✔
259 (78)	31 (100)	68 (94)	21 (11)	48 (72)	193 (48)	21 (95)	65 (81)	20	●	↗	✔
236 (71)	3 (10)	8 (11)	70 (38)	51 (76)	254 (64)	3 (14)	14 (18)	21	●	↘	✔
0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	22			
12 (4)	1 (3)	1 (1)	2 (1)	—	4 (1)	0 (0)	3 (4)	23			
20 (6)	3 (10)	6 (8)	18 (10)	—	18 (5)	1 (5)	4 (5)	24			
4 (1)	26 (84)	51 (71)	1 (1)	—	1 (0)	16 (73)	52 (65)	25	●	↗	
19 (6)	2 (6)	3 (4)	19 (10)	—	29 (7)	2 (9)	6 (8)	26			
0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	7 (10)	3 (1)	0 (0)	0 (0)	27			
6 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	—	9 (2)	0 (0)	2 (3)	28			
59 (18)	12 (39)	18 (25)	25 (14)	—	59 (15)	5 (23)	12 (15)	29	○	↗	
97 (29)	0 (0)	2 (3)	9 (5)	—	150 (38)	0 (0)	1 (1)	30	●	↘	✔
40 (12)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	—	33 (8)	0 (0)	0 (0)	31	○	↘	✔
85 (25)	15 (48)	43 (60)	3 (2)	—	132 (33)	8 (36)	65 (81)	32	●	↗	✔
108 (32)	4 (13)	15 (21)	9 (5)	29 (43)	130 (33)	4 (18)	20 (25)	33			✔
7 (2)	0 (0)	5 (7)	8 (4)	—	4 (1)	0 (0)	2 (3)	34			
8 (2)	28 (90)	61 (85)	29 (16)	—	5 (1)	17 (77)	62 (78)	35	●	↗	
10 (3)	2 (6)	0 (0)	8 (4)	—	1 (0)	0 (0)	2 (3)	36			
7 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	—	4 (1)	0 (0)	0 (0)	37			
58 (17)	2 (6)	4 (6)	32 (17)	10 (15)	62 (16)	1 (5)	6 (8)	38	○	↘	
6 (2)	0 (0)	0 (0)	13 (7)	—	4 (1)	0 (0)	0 (0)	39			✔
0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (2)	—	2 (1)	0 (0)	0 (0)	40			
1 (0)	1 (3)	3 (4)	0 (0)	—	1 (0)	1 (5)	5 (6)	41	○	↗	
2 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	42			
17 (5)	0 (0)	3 (4)	0 (0)	4 (6)	25 (6)	1 (5)	2 (3)	43			
22 (7)	0 (0)	0 (0)	26 (14)	—	44 (11)	0 (0)	0 (0)	44	○	↘	
14 (4)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	—	26 (7)	0 (0)	0 (0)	45	○	↘	
0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	46			
4 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	—	3 (1)	0 (0)	0 (0)	47			
4 (1)	0 (0)	0 (0)	26 (14)	—	4 (1)	0 (0)	0 (0)	48			✔
0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	49			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	—	0 (0)	0 (0)	0 (0)	50			
0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	—	1 (0)	0 (0)	0 (0)	51			
82 (25)	0 (0)	1 (1)	6 (3)	34 (51)	122 (31)	0 (0)	2 (3)	52	●	↘	✔
27 (8)	0 (0)	0 (0)	5 (3)	—	41 (10)	0 (0)	2 (3)	53	○	↘	
1 (0)	1 (3)	6 (8)	11 (6)	—	1 (0)	1 (5)	3 (4)	54			
7 (2)	1 (3)	1 (1)	18 (10)	—	1 (0)	1 (5)	3 (4)	55			
105 (31)	10 (32)	18 (25)	120 (66)	—	166 (42)	11 (50)	25 (31)	56	○	↘	✔
2 (1)	0 (0)	0 (0)	7 (4)	—	2 (1)	0 (0)	2 (3)	57			
112 (34)	0 (0)	7 (10)	9 (5)	—	132 (33)	3 (14)	12 (15)	58	●	↘	✔
270 (81)	19 (61)	54 (75)	157 (86)	52 (78)	332 (83)	17 (77)	66 (83)	①			
93 (28)	0 (0)	5 (7)	49 (27)	7 (10)	162 (41)	2 (9)	4 (5)	②	●	↘	✔
35 (10)	22 (71)	36 (50)	—	0 (0)	13 (3)	13 (59)	46 (58)	③	●	↗	
11 (3)	1 (3)	0 (0)	15 (8)	0 (0)	35 (9)	1 (5)	1 (1)	④			
32 (10)	0 (0)	1 (1)	39 (21)	0 (0)	59 (15)	0 (0)	3 (4)	⑤	○	↘	✔

表3　今昔の比較結果のまとめ

昔	形態部	今
上へ上へ (30, 31, 58)	幹	ほどほどで (32)
たくさん繁る (8, 9)	枝	あまり描かない (③)
枝と葉で描く (8, 9, 21, 分枝)	樹冠	包冠線で囲む (35)
枝になる (枝に付いた実)	実	樹冠内に浮く (25)

上段　：カテゴリーごとの特徴
(下段)：指標 No. か、指標には表れない描画表現

【考察】

1）早期型をめぐって

本研究の目的より、まずは発達指標と理解できる早期型に着目して、昔（1960 年代）と今（2010 年代）のバウム表現を考える。ほとんどの早期型は今昔において差は無く、「No. 17：暗く塗られた幹」と「No. 18：暗く塗られた枝」のみに差が認められた。Koch（1957/2010, pp. 206-212）によれば、両指標における年齢と出現頻度との関係は、11-12 歳程度を底に逆 U 字型を示していることから、本結果のみで今昔の中学生の発達的特徴を論じることは難しい。したがって、本検討から言えることは、中学

表4　幹先端処理による今昔比較

	中1			中2			中3				
データ名	山中	岸本ら	佐渡	山中	岸本ら	佐渡	山中	岸本ら	佐渡		
調査地域	愛知	京都	岐阜	愛知	京都	岐阜	愛知	京都	岐阜		
調査年	1967 年	2010 年	2011-13 年	1967 年	2010 年	2011 年	1967 年	2010 年	2011 年	時代的影響	昔よりも今で
対象者数 (男/女)	345 名 (148/197)	32 名 (16/16)	188 名 (99/89)	334 名 (187/147)	31 名 (15/16)	72 名 (32/40)	398 名 (204/194)	22 名 (10/12)	80 名 (39/41)		
指標名	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)		
開放型	48 (14)	5 (16)	29 (15)	55 (16)	3 (10)	8 (11)	67 (17)	3 (14)	6 (8)		
完全開放型	8 (2)	1 (3)	3 (2)	1 (0)	0 (0)	1 (1)	4 (1)	0 (0)	1 (1)		
閉鎖不全型	11 (3)	1 (3)	0 (0)	7 (2)	0 (0)	1 (1)	11 (3)	0 (0)	1 (1)		
先端漏洩型	18 (5)	0 (0)	3 (2)	32 (10)	1 (3)	0 (0)	39 (10)	2 (9)	1 (1)	○	↘
冠漏洩型	11 (3)	3 (9)	23 (12)	15 (4)	2 (6)	6 (8)	13 (3)	1 (5)	3 (4)	○	↗
閉鎖型	205 (59)	25 (78)	140 (74)	193 (58)	28 (90)	61 (85)	239 (60)	17 (77)	68 (85)	○	↗
冠型	16 (5)	16 (50)	110 (59)	18 (5)	25 (81)	41 (57)	13 (3)	9 (41)	49 (61)	●	↗
放散型	95 (28)	7 (22)	24 (13)	111 (33)	3 (10)	16 (22)	136 (34)	6 (27)	16 (20)	○	↘
基本型	71 (21)	1 (3)	4 (2)	40 (12)	0 (0)	3 (4)	75 (19)	1 (5)	1 (1)	●	↘
その他の閉鎖型	23 (7)	1 (3)	2 (1)	24 (7)	0 (0)	1 (1)	15 (4)	1 (5)	2 (3)		
その他	92 (27)	2 (6)	19 (10)	86 (26)	0 (0)	3 (4)	92 (23)	2 (9)	6 (8)	●	↘
上縁はみ出し	117 (34)	3 (9)	26 (14)	112 (34)	0 (0)	7 (10)	132 (33)	3 (14)	12 (15)	●	↘
幹はみ出し	54 (16)	2 (6)	0 (0)	54 (16)	0 (0)	0 (0)	55 (14)	0 (0)	0 (0)	●	↘
枝はみ出し	70 (20)	1 (3)	0 (0)	75 (22)	0 (0)	0 (0)	92 (23)	0 (0)	1 (1)	●	↘
樹冠はみ出し	14 (4)	1 (3)	24 (13)	11 (3)	0 (0)	7 (10)	11 (3)	3 (14)	11 (14)	○	↗

生という発達段階では、約半世紀という時代の流れがあっても、早期型の出現頻度はほとんど変わっていない、ということだけになろう。

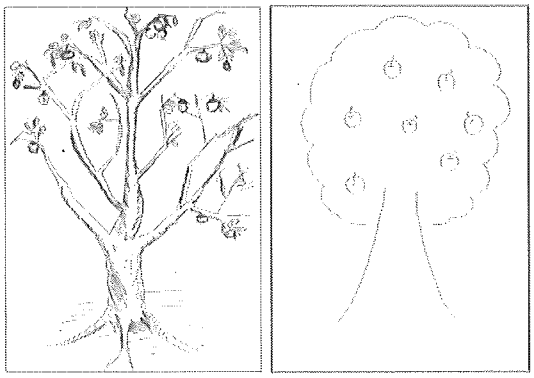
今昔で早期型に差はないものの、Koch の 58 指標で興味深い差がいくつか認められた。これらの差は、時代と表現との関連を検討した先行研究の結果とほぼ一致している（津田，1994；小川，1995；長屋，1999；依田，2007；岸本ら，2012）。今昔で実物のバウムを見比べると、数量的に示された結果以上に、大きなインパクトをわれわれに与えるだろう（図 1：また参考資料として末尾にバウムを数例図示した）。昔に比べ今の中学生のバウムは、いささか単調に見える。また、「上縁はみ出し」が減り、幹と枝がほとんどはみ出さない今の中学生の表現は、昔よりも迫力と勢いが減じているように受け取れる（ただし、「今よりも昔は良かった」などという一面的な立場から結果を理解すべきではない）。こうした表現の差異は、概ね幹先端処理の差異と理解できるため、この点に注目して考察を進めたい。

2）幹先端処理から見えるもの

昔は枝と葉で幹上部の描画課題に取り組み、樹冠エリアを構成する傾向があった一方で、今のバウムは包冠線で樹冠エリアを形作る方略で幹上部の課題を乗り越えやすいようである。では、何故こうした差異は生じるのか？

約半世紀という時代の間にこうした差異を生じさせた要因として、われわれはさまざまなもの（社会動向の差異、教育の変化、自己イメージの差、コミュニケーション法の違い、アニメの影響など）を思い浮かべることはできる。しかし、そのどれから説明を試みたとしても、説得力に欠けるように思われる。そこで、現象学な理解を試みるために、六つの属性を定めて二択法による今昔比較を行った（表 5）。このように考えてみると、今昔で幹先端処理に大きな違いが生じていることがはっきりとし、とりわけ、今日の中学生が枝を描かないことが顕著な違いであると考えられた。

時代という漠然とした要因が、どのように働いたかを捉えることは難しい。しかし、時代が中学生のバウム表現にどれほど強力に影響を与えているかは、本結果から読み取ることができる。もしかすると、Michael Ende が著書『モモ』で表現したあの時間泥棒は、現代のバウム表現という文脈においては、枝を盗るという形で表れているのかもしれない。枝は、語源的には手と関連を持ち、その形態部はチカラや主体



昔の一例　　今の一例

図 1　今昔のバウム例（ともに中 3 男子）

表 5　幹先端処理からみた今昔比較

昔		今
＋	樹木らしさ	－
＋	描画時のｴﾈﾙｷﾞｰ量	－
＋	描画時の葛藤体験	－
＋	不器用さの露出	－
－	輪郭確保の合理性	＋
－	外見上の守られ感	＋

性、周囲との関わりを表わす部分と解せる。そうするならば、枝（手・私）を描く（表現する）という在り様が、昔にくらべ今日の中学生には稀薄であるということが、今昔での主たる差だと考えることができよう。

あるいは、バウムの基本となる幹から出る枝は、四季で表情を変える葉を茂らせ、結果としての果実を付ける上で、重要なバウム形態部であり、中間段階と考えることもできる。であれば、現代の中学生は、中間段階を抜いてただちに結論だけを引き出そうとする傾向にある、と解釈することができるかもしれない。

【結論】

本研究は1960年代と2010年代の中学生のバウムを比較した。その結果、早期型は今昔で差が無く、幹先端処理では昔よりも今で「冠型」が増え、「放散型」と「基本型」が少なかった。特に現代のバウムは、枝がほとんど描かれないことが特徴的であった。

半世紀の間に中学生のバウム表現がどのように変化したかに関しては、一部、本研究で明らかにできた。しかし、そのメカニズムを考察するまでには至らなかった。本研究をさらに推し進め、より信頼できる発達知見を得るためには、十分な年齢幅とデータ数から、改めて発達研究を実施することが不可欠であろう。今後の課題である。

【付記】

本研究助成の一部を活用し、2014年3月30日、「バウムの古今東西～十字路に佇んでイメージする力～」というシンポジウムを京都で開催した（心身臨床学研究会との共催）。貴重な指摘を賜わった参加者・関係者に謝意を表す。

【引用文献】

中島ナオミ（2008）．コッホのドイツ語原著における58指標の判定基準．関西福祉科学大学紀要，12：71-90.

中島ナオミ（2010）．58指標の出現率表について．In；Koch, K.著，岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳，バウムテスト［第3版］――心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究．誠信書房．pp.345-351.

Koch, K.（1957）．*Der Baumtest : der Baumzeichenversuch als psycho-diagnostisches Hilfsmittel.* 3.Auflage. Bern：Verlag Hans Huber．岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳（2010）．バウムテスト［第3版］――心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究．誠信書房．

一谷彊・林勝造・津田浩一（1968）．樹木画テストの研究――KochのBaumtestにおける発達的検討．京都教育大学紀要 Ser.A. 33：47-68.

岸本寛史・岸本幹史（2012）．バウムテストの発達指標の時代的影響に関する研究――木の上部と下部に着目して．ヘルメス心理療法研究，15：31-41.

藤岡喜愛・吉川公雄（1971）．人類学的に見た，バウムによるイメージの表現．季刊人類学，2(3)：3-28.

岸本寛史（2002）．バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群．心理臨床学研究，20(1)：1-11.

長屋正男（1999）．児童の人格と社会的変遷（II）――小学生のバウムテストからみた24年間の変化．大阪市社会福祉研究，22：64-74.

小川俊樹（研究代表）（2011）．心理臨床に必

要な心理査定教育に関する調査研究．第 1 回日本臨床心理士養成大学院協議会研究助成（B 研究助成），研究成果報告書．

小川芳子(1995)．樹木画テスト 17 年の経年変化．共立薬科大学研究年報，40：5-17.

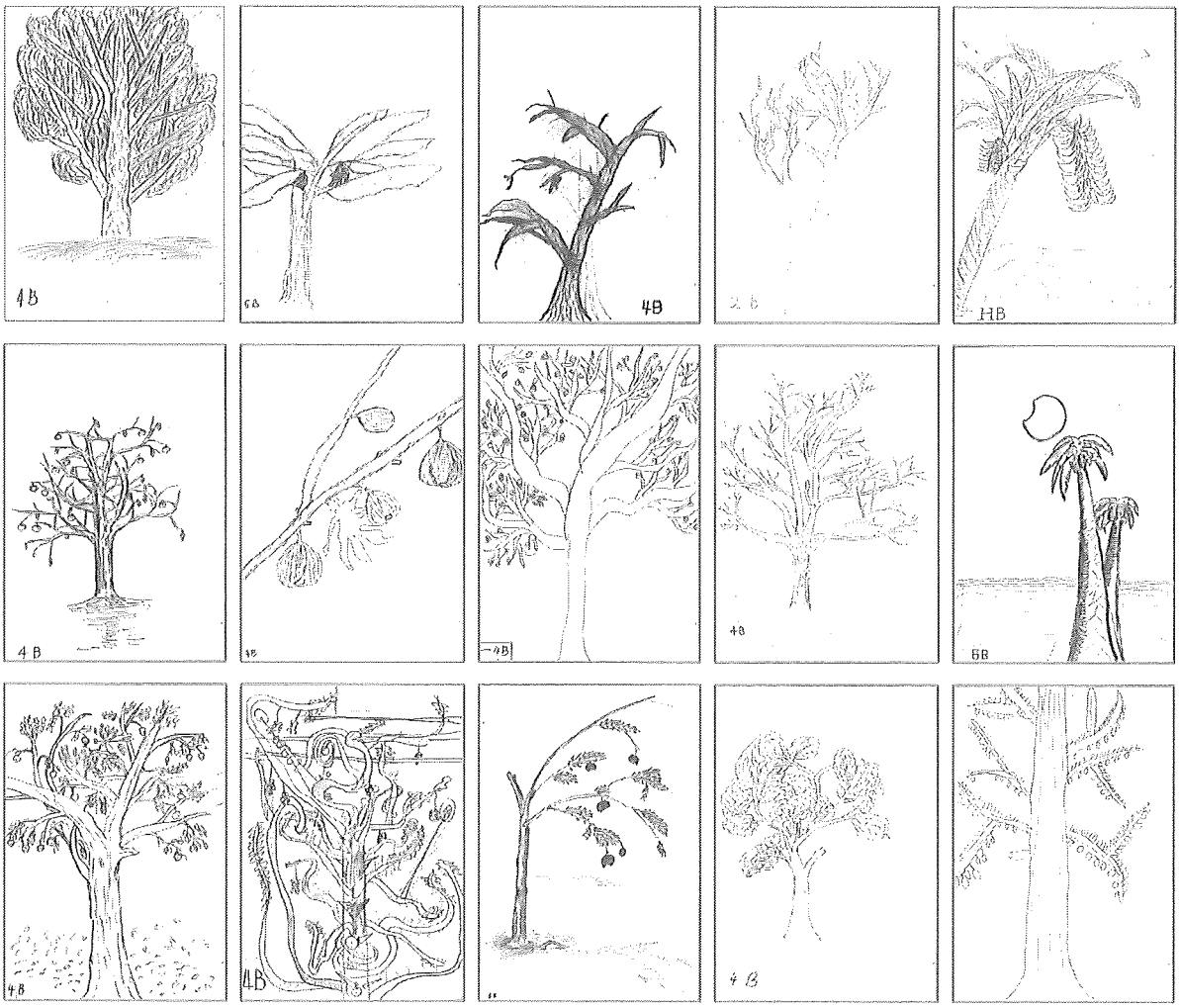
津田浩一（1994）．児童の人格と社会的変遷(I)――幼稚園児のバウムテストからみた 24 年間の変化．小児の精神と神経，34(4)：195-206.

依田茂久（2007）．樹木画テストにおける近年の児童の発達状況の変化について――発達指標の経年的比較・検討．臨床描画研究，22：187-210.

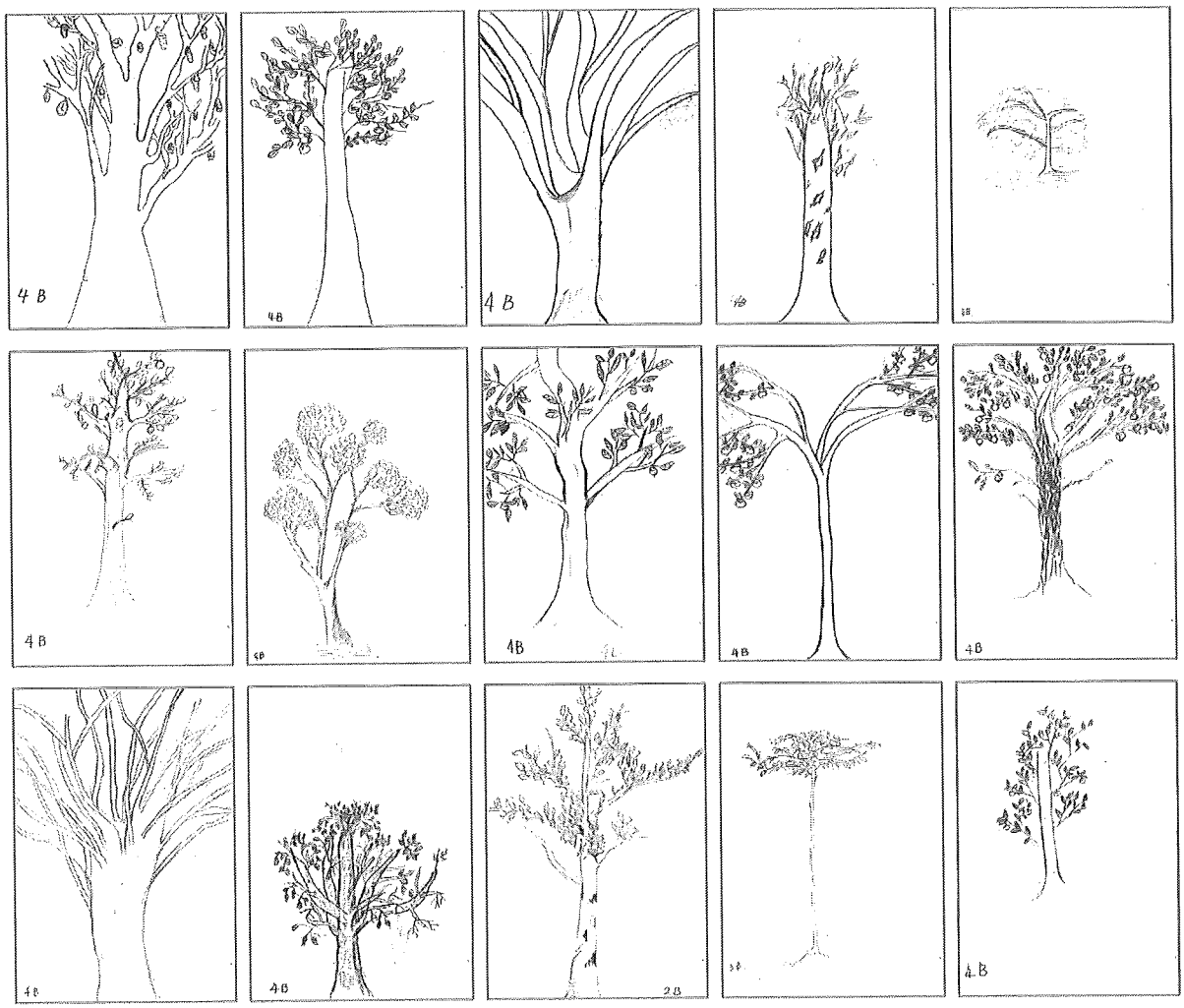
坂本佳織・佐渡忠洋・岸本寛史（2012）．バウムテストのスポットライト分析．心理臨床学研究，30(1)：41-50.

山中康裕（2003）．私のバウムテスト研究の歴史的回顧．In；山中康裕著，岸本寛史編，たましいの形――芸術・表現療法(1)(山中康裕著作集，5 巻)．岩崎学術出版社，pp. 43-58.

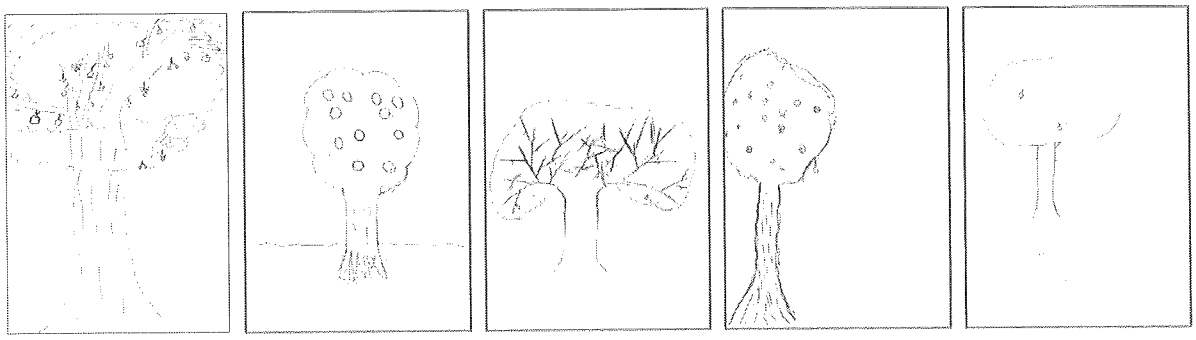
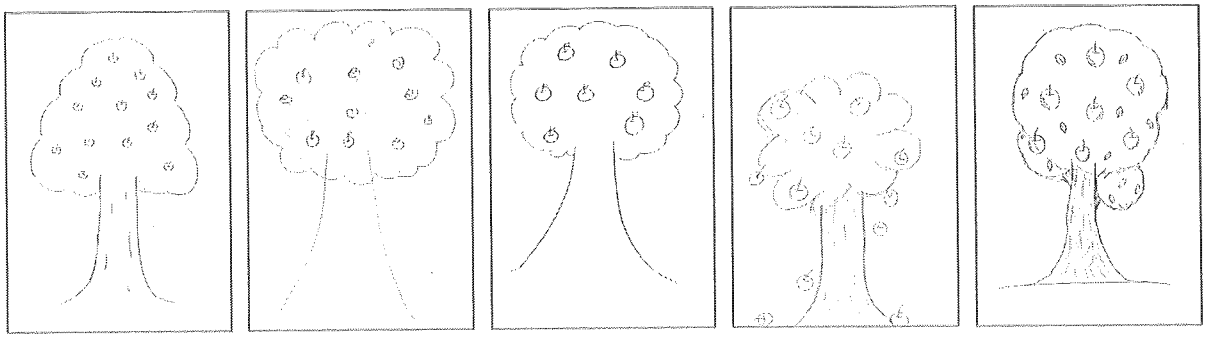
【バウムの例（1967 年：中 1：男子）】



【バウムの例（1967 年：中 1：女子）】



【バウムの例（2011 年：中 1：男子）】



【バウムの例（2011 年：中 1：女子）】